

**題名：「韓国学資料研究のための学生・ポストドクワークショップ in Seoul」参加記**

**氏名：関東暉**

**所属：東京大学大学院総合文化研究科**

**専攻：地域文化研究専攻博士後期課程 2 年（2016 年 3 月現在）**

2016 年 2 月 21 日～24 日の日程で「韓国学資料研究のための学生・ポストドクワークショップ in Seoul」が行われた。私自身、敗戦直後の日本における「朝鮮問題」ないし「植民地問題」に関心を持って勉強を続けており、今後このような問題関心を広げ、日本だけでなく朝鮮半島を視野に入れて、ポスト植民地期における東アジアの「植民地問題」について研究していきたいと考えている。そのため、韓国の資料館や研究所に訪問する今回のワークショップを通して、資料館ではどのような資料が所蔵されているか、またどのように資料の調査・収集・保存が行われているのかについて、研究所ではどのような研究がどのような視点から、あるいはどのような社会的ニーズから行われているのかについて知ることができると思い、ワークショップへの参加を志望した。今回の経験を通して、韓国における韓国学、また日本および東アジア研究の現状について考えるととても有意義な機会を得ることができたと考える。

22 日には、韓国の城南市に位置する世宗研究所と国家記録院を訪れた。

1983 年のラングーン事件を契機に組織された民間シンクタンクの世宗研究所は、外交政策の提案や次世代の外交人材のための研修などを行っている機関である。李相賢研究企画本部長の講義「韓国の民間シンクタンクと外交安保研究動向」を通して、どのように世宗研究所が運営されているのか、どのような政策提案をどのような過程を経て行っているのかについて詳しく知ることができた。特に、良い政策提案のために、研究所としてはあえて統一方針を決めずに所属している研究員の自由な意思交換を促していることが深く印象に残った。現在、世宗研究所では北朝鮮に関する研究が活発であり、研究所が所蔵する貴重な北朝鮮関連の資料群も直接閲覧することができた。

世宗研究所のすぐ隣に位置する国家記録院では、直接職員の方から資料の保存方法について、実際の保存のプロセスを見せていただきながら説明していただいた。研究資料を見る者として、どのような過程を経て資料が閲覧できる状態になるのか、普段あまり気にしたことのない（特に歴史資料の修復など）資料保存の方法について考えさせられ、様々な方々の努力があつて研究者の研究成果があることを改めて実感することができた。

23 日には、果川市に位置する国史編纂委員会を訪れた。その名称通り、ここは政府が運営主体となっており、主に韓国の国史を編纂するための膨大なデータベースを構築している。データのデジタル化が急速に進んでおり、そのデータの活用法について所属の先生

に丁寧に説明していただいた。実際に検索してみると、日本でも手に入れることが困難な敗戦直後の在日朝鮮人関係の資料もすでに多数がデジタル化されており、その膨大な資料群に驚いた。日本だけではなく、アメリカや他の国の韓国史関連資料の収集・整理も進んでいたが、しかし現代史の資料に関しては、他の時代と比べて資料収集がやや遅れているとも思えた。韓国だけではないが、「現代史」（解放後）がまだ「歴史化」されていないゆえんであると感じ、歴史の中の「現代史」の位置づけについて改めて考える機会を得た。

23日の午後には、ソウル市に位置する国民大学校日本研究所を訪れ、韓国における日本研究所の役割や、実際に研究所でどのような教育と研究活動が行われているのかについてうかがう機会を得た。

さらに、柳美那先生の講義「資料検索の方法と練習」では、歴史資料の使い方および活用法について、また歴史研究の意義などについてお話をうかがうことができ、歴史研究を志す者としてどんな姿勢で研究に臨むべきかについて深く考えさせられた。

また、講義後の国民大学校の現役学生たちとの交流会では、韓国における「日本学」の教育について、現場の学生たちからの意見を聞くことができ、とても有意義な時間を過ごせた。

ワークショップ最終日の24日には、ソウル市にある外交史料館を訪れた。職員の説明や質疑応答の時間を通して、韓国の外交史料館の特徴、たとえばアメリカや日本の外交史料館とは異なって歴史研究者ではなく文献情報学の専門家たちがスタッフの中心となっているため史料の利用や保存に力を入れていることなどについて初めて知り、とても印象深かった。また韓国の外交史料館では、歴史を研究する人だけでなく市民にも開放していて、市民の参加イベントが豊富であると感じた。

さらに、史料館でどのような手続きを経て外交関係の公文書が公開されるに至るのかについてもさらなる理解を深めることができた。

最後に、本ワークショップを通して、先生方々をはじめ、一緒に参加した多様なディシプリンから「韓国学」に携わっている研究者のみなさんと、研究に関わる様々な情報が共有できたことはとても貴重な経験であり、この経験を今後の研究生活において大切にしていきたいと思う。